

夫それおもんみ以れば法華經第四の法師品に云はく「若し悪人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん、其の罪尚輕し。若し人一つの悪言を以て在家・出家の法華經を誦誦する者を毀訾せん、其の罪甚だ重し」等云云。妙樂大師云はく「然も此の經の功高く理絶えたるに約して此の説を作すことを得。余經は然らず」等云云。此の經文の心は、一劫とは人壽八万歳ありしより百年に一歳をすて千年に十歳をすつ。此の如く次第に減ずる程に人壽十歳になりぬ。此の十歳の時は当時の八十の翁のごとし。又人壽十歳より百年ありて十一歳となり、又百年ありて十二歳となり、乃至一千年あらば二十歳となるべし、乃至八万歳となる。此の一減一増を一劫とは申すなり。又種々の劫ありといへども且く此の劫を以て申すべし。此の一劫が間、身口意の三業より事おこりて仏をにくみたてまつる者あるべし。例せば提婆達多がごとし。仏は淨飯王の太子、提婆達多は斛飯王の子なり。兄弟の子息同じく仏の御いとこにてをはせしかども、今も昔も聖人も凡夫も人の中をたがへること女人よりして起こりたる第一のあだにてはんべるなり。釈迦如来は悉達太子としてをはし、時、提婆達多も同じ太子なり。耶輸大臣に女あり、耶輸多羅女となづく。五天竺第一の美女、四海名譽の天女なり。悉達と提婆と共に後にせん事をあらそひ給ひし故に中あしくならせ給ひぬ。後に悉達は出家して仏とならせ給ひ、提婆達多又須陀比丘を師として出家し給ひぬ。仏は二百五十戒を持ち、三千の威儀をととのへ給ひしかば、諸の天人これを渴仰し、四衆これを恭敬す。提婆達多を人たとまざりしかば、いかにしてか世間の名譽仏にすぎんとはげみしほどに、とかう案じいだして仏にすぎて世間にたとまれぬべき事五つあり。四分律に云はく、一には糞掃衣、二には常乞食、三には一座食、四には常露座、五には塩及び五味を受けず等云云。仏は人の施す衣をうけさせ給う、提婆達多は糞掃衣。仏は人の施す食をうけ給ふ、提婆は只常乞食。仏は一日に一二三反も食せさせ給ふ、提婆は只一座食。仏は塚間樹下にも処し給ふ、提婆は日中常露座なり。仏は便宜にはしを復は五味を服し給ふ、提婆はしを等を服せず。かうありしかば世間、提婆の仏にすぐれたる事雲泥なり。かくのごとくして仏を失ひたてまつらんとくかゞひし程に、頻婆舍羅王は仏の檀那なり。日々に五百輛の車を数年が間一度もかゞさずおくりて、仏並びに御弟子等を供養し奉る。これをそねみとらんがために、未生怨太子をかたらつて父頻婆舍羅王を殺させ、我は仏を殺さんとして或は石をもて仏を打ちたてまつるは身業なり。仏は誑惑の者と罵詈せしは口業なり。内心より宿世の怨をもいしは意業なり。三業相應の大悪此にはすぐべからず。此の提婆達多ほどの大悪人、三業相應して一中劫が間、釈迦仏を罵詈打擲し嫉妬し候はん大罪はいくらほどこか重く候べきや。此の大地は厚さは十六万八千由旬なり。されば四大海の水をも、九山の土石をも、三千の草木をも、一切衆生をも頂戴して候へども、落ちもせずかたぶかず、破れずして候ぞかし。しかれども提婆達多

が身は既に五尺の人身なり。わづかに三逆罪に及びしかば大地破れて地獄に入りぬ。此の穴天竺にいまだ候。玄奘三蔵漢土より月支に修行して此をみる。西域記と申す文に載せられたり。而るに法華經の末代の行者を心にもをもはず、色にもそねまず、只たわぶれてのりて候が、上の提婆達多がごとく三業相応して一中劫、仏を罵詈訾し奉るにすぎて候ととかれて候。何に況んや当世の人の提婆達多がごとく三業相応しての大悪心をもて、多年が間法華經の行者を罵詈訾・毀辱・嫉妬・打擲・讒死・歿死に当てんをや。

問うて云はく、末代の法華經の行者を怨める者は何なる地獄に墮つるや。答へて云はく、法華經の第二に云はく「經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん。一劫を具足して劫尽きなば復死し展轉して無数劫に至らん」等云云。此の大地の下五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり。其の炎魔王宮より下一千五百由旬が間に、八大地獄並びに一百三十六の地獄あり。其の中に一百二十八の地獄は輕罪の者の住处、八大地獄は重罪の者の住处なり。八大地獄の中に七大地獄は十惡の者の住处なり。第八の無間地獄は五逆と不孝と誹謗との三人の住处なり。今法華經の末代の行者を戲論にも罵詈訾誹謗せん人々はおつべしと説き給へる文なり。法華經の第四法師品に云はく「人有つて仏道を求めて一劫の中に於て乃至持經者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん」等云云。妙樂大師云はく「若し悩乱する者は頭七分に破れ、供養すること有らん者は福十号に過ぐ」等云云。

夫人中には轉輪聖王第一なり。此の輪王出現し給ふべき前相として、大海の中に優曇華と申す大木生ひて華さき実なる。金輪王出現して四天の山海を平らかにす。大地は綿の如くやはらかに、大海は甘露の如くあまく、大山は金山、草木は七宝なり。此の輪王須臾の間に四天下をめぐる。されば天も守護し、鬼神も来たつてつかへ、竜王も時に随つて雨をふらす。劣夫なんどもこれに従ひ奉れば須臾に四天下をめぐる。是偏に轉輪王の十善の感得せる大果報なり。毘沙門等の四大天王は又これには似るべくもなき四天下の自在の大王なり。帝釈は忉利天の主、第六天の魔王は欲界の頂に居して三界を領す。此は上品の十善戒、無遮の大善の所感なり。大梵天王は三界の天尊、色界の頂に居して魔王・帝釈をしたがへ、三千大千界を手ににぎる。有漏の禪定を修行せる上に慈悲喜捨の四無量心を修行せる人なり。声聞と申して舍利弗・迦葉等は二百五十戒、無漏の禪定の上に苦・空・無常・無我の觀をこらし、三界の見思を断尽し水火に自在なり。故に梵王と帝釈とを眷屬とせり。縁覺は声聞に似るべくもなき人なり。仏と出世をあらそふ人なり。昔獵師ありき、飢えたる世に利吒と申す辟支仏にひえの飯を一盃供養し奉りて、彼の獵師九十一劫が間、人中天上の長者と生まる。今生には阿那律と申す天眼第一の御弟子なり。此を妙樂大師釈して云はく「稗飯輕しと雖も所有を尽くし、及び田勝るゝを以ての故に勝るゝ報を得る」等云云。釈の心はひえの飯は輕しといへども貴き辟支仏を供養する故に、かゝる大果報に度々生まるとこそ書かれて候へ。又菩薩と申すは文殊・彌勒等なり。此の大菩薩等は彼の辟支仏に似るべからざる大人なり。仏は四十二品の無明と申す闇を破る妙覺の仏なり。八月十五夜の満月のごとし。此の菩薩

等は四十一品の無明をつくして等覺の山の頂にのぼり、十四夜の月のごとし。仏と申すは上の諸人には百千万億倍すぐれさせ給へる大人なり。仏には必ず三十二相あり。其の相と申すは梵音^{ぼんのんじょう}・聲^{むけんちょうそう}・無見頂相^{にくけいそう}・肉髻相^{びやくごうそう}・白毫相^{せんぶくりんそう}・乃至千輻輪相等なり。此の三十二相の中の一相をば百福を以て成じ給へり。百福と申すは、仮令大医ありて日本国、漢土、五天竺の十六の大国・五百の中国・十千の小国、乃至一閻浮提・四天下・六欲天・乃至三千大千世界の一切衆生の眼の^{めしい}盲^あたるを、本の如く一時に開けたらんほどの大功德を一つの福として、此の福百をかさねて候はんを以て三十二相の中の一相を成ぜり。されば此の一相の功德は三千大千世界の草木の数よりも多く、四天下の雨の足よりもすぎたり。設^{たと}ひ壞劫の時僧^{えこう}佉陀^{そうぎやだ}と申す大風ありて、須弥山^{しゅみせん}を吹き抜いて色究竟天^{しきくきょうてん}にあげてかへて微塵となす大風なり。然れども仏の御身の一毛をば動かさず。仏の御胸に大火あり。平等大慧大智光明火坑^{かきょう}三昧と云ふ。涅槃の時は此の大火を胸より出だして一身を焼き給ひしかば、六欲四海の天神・竜衆等、仏を惜しみ奉る故にあつまりて大雨を下らし、三千の大地を水となし、須弥は流るといへども此の大火はきへず。仏にはかゝる大徳ましますゆへに、阿闍世王^{あじゃせ}は十六大国の悪人を集め、一四天下の外道をかたらひ、提婆を師として無量の悪人を放ちて仏弟子をのりうち、殺害せしのみならず賢王にてとがもなかりし父の大王を、一尺の釘をもて七処までうちつけ、はつけにし、生母をば玉のかんざしをつかみ、刀を頭にあてし重罪^{じゆう}のつもり、悪瘡七処に出でて、三七日を経て三月七日に大地破れて無間地獄に墮ちて一劫^ふを経べかりしかども、仏の所^{みもと}に詣^{もう}で悪瘡^{あくそう}いゆるのみならず、無間地獄の大苦をまぬがれ四十年の寿命延びたりき。又耆婆大臣も御つかひなりしかば、炎の中に入って瞻婆長者が子を取り出だしたりき。之を以て之を思ふに、一度も仏を供養し奉る人はいかなる悪人・女人なりとも成仏得道疑ひ無し。提婆には三十相あり。二相かけたり。所謂白毫と千輻輪となり。仏に二相劣りたりしかば弟子等軽く思ひぬべしとて、萤火^{ほたるび}をあつめて眉間につけて白毫と云ひ、千輻輪には鍛冶に菊形をつくらせて足に付けて行くほどに足焼けて大事になり、結句死せんとせしかば仏に申す。仏御手を以てなで給ひしかば苦痛さきき。こゝにて改悔あるべきかと思ひしに、さはなくして瞿曇^{くどうん}が習ふ医師はこざかしかりけり、又術にて有るなど云ひしなり。かゝる敵にも仏は怨をなし給はず。何に況んや仏を一度も信じ奉る者をば争でか捨て給ふべきや。

かゝる仏なれば木像・画像^えにうつし奉るに、優填大王^{うでん}の木像は歩みをなし、摩騰^{まとう}の画像は一切経を説き給ふ。是程に貴き教主釈尊を一時二時ならず、一日二日ならず、一劫が間掌を合はせ両眼を仏の御顔にあて、頭^{こうべ}を低れて他事を捨て、頭の火を消さんと欲するが如く、渴して水ををもひ飢ゑて食を思ふがごとく、間無く供養し奉る功德よりも、戲論^{けろん}に一言継母の継子をほむるが如く、心ざしなくとも末代の法華経の行者を讚め供養せん功德は、彼の三業相応の信心にて、一劫が間生身の仏を供養し奉るには、百千万億倍すぐべしと説き給ひて候。これを妙楽大師は福過十号とは書かれて候なり。十号と申すは仏の十の御名^{みな}なり。十号を供養せんよりも、末代の法華経の行者を供養せん功德は

勝るとかゝれたり。妙樂大師は法華經の一切經に勝れたる事を二十あつむる其の一なり。已上。

上の二つの法門は仏説にては候へども心えられぬ事なり。争でか仏を供養し奉るよりも凡夫を供養するがまさるべきや。而れども此を妄語といはんとすれば釈迦如来の金言を疑ひ、多宝仏の証明を輕しめ、十方諸仏の舌相をやぶるになりぬべし。若し爾らば現身に阿鼻地獄に墮つべし。巖石にのぼりてあら馬を走らするが如し。心肝しづかならず。又信ぜば妙覺の仏にもなりぬべし。如何にしてか今度法華經に信心をとるべき。信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つるがごとし。但し近き現証を引いて遠き信を取るべし。仏の御歳八十の正月一日、法華經を説きおはらせ給ひて御物語あり。阿難・弥勒・迦葉、我世に出でし事は法華經を説かんがためなり。我既に本懐をとげぬ。今は世にありて詮なし。今三月ありて二月十五日に涅槃すべし云云。一切内外の人々疑ひをなせしかども、仏語むなしからざれば、ついに二月十五日に御涅槃ありき。されば仏の金言は実なりけるかと少し信心はとられて候。又仏記し給ふ。我が滅度の後一百年と申さんに阿育大王と申す王出現して、一閻浮提三分の一分が主となりて、八万四千の塔を立て我が舍利を供養すべしと云云。人疑ひ申さんほどに案の如くに出現して候ひき。是よりしてこそ信心をばとりて候ひつれ。又云はく、我が滅後に四百年と申さんに迦式色迦王と申す大王あるべし。五百の阿羅漢を集めて婆沙論を造るべしと。是又仏記のごとくなりき。是等をもてこそ仏の記文は信ぜられて候へ。若し上に挙ぐる所の二つの法門妄語ならば此の一經は皆妄語なるべし。寿量品に我は過去五百塵点劫のそのかみの仏なりと説き給ふ。我等は凡夫なり、過ぎにし方は生まれてより已来すらなをおぼへず。況んや一生・二生をや。況んや五百塵点劫の事をば争でか信ずべきや。又舍利弗等に記して云はく「汝未来世に於て無量無辺不可思議劫を過ぎ乃至当に作仏することを得べし。号を華光如来と曰ん」云云。又々摩訶迦葉に記して云はく「未来世に於て乃至最後身に於て仏に成爲ることを得ん。名を光明如来と曰ん」云云。此等の經文は又未来の事なれば、我等凡夫は信ずべしともおぼえず。されば過去未来を知らざらん凡夫は此の經は信じがたし。又修行しても何の詮かあるべき。是を以て之を思ふに、現在に眼前の証拠あらんずる人、此の經を説かん時は信ずる人もありやせん。

今法蓮上人の送り給へる諷誦の状に云はく「慈父幽霊第十三年の忌辰に相当たり一乗妙法蓮華經五部を転読し奉る」等云云。夫教主釈尊をば大覺世尊と号したてまつる。世尊と申す尊の一字を高と申す。高と申す一字は又孝と訓ずるなり。一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊とは号し奉る。釈迦如来の御身は金色にして三十二相を備へ給ふ。彼の三十二相の中に無見頂相と申すは、仏は丈六の御身なれども、竹杖外道も其の御長をはからず、梵天も其の頂を見ず。故に無見頂相と申す。是孝養第一の大人なればかゝる相を備へまします。孝經と申すに二あり。一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝經あり。二には内典今の法華經是なり。内外異なれども其の意は是同じ。釈尊

塵点劫の間修行して仏にならんとはげみしは何事ぞ、孝養の事なり。然るに六道四生の一切衆生は皆父母なり。孝養おへざりしかば仏にならせ給はず。今法華經と申すは一切衆生を仏になす秘術まします御經なり。所謂地獄の一人・餓鬼の一人乃至九界の一人を仏になせば、一切衆生皆仏になるべきことほり顯はる。譬へば竹の節を一つ破りぬれば余の節亦破るゝが如し。困碁と申すあそびにしちやうと云ふ事あり。一つの石死ぬれば多くの石死ぬ。法華經も又此くの如し。金と申すものは木草を失ふ用を備へ、水は一切の火をけす徳あり。法華經も又一切衆生を仏になす用おはします。六道四生の衆生に男女あり。此の男女は皆我等が先生せんじょうの父母なり。一人ももれば仏になるべからず。故に二乗をば不知恩の者と定めて永不成仏と説かせ給ふ。孝養の心あまねからざる故なり。仏は法華經をさとらせ給ひて、六道四生の父母孝養の功德を身に備へ給へり。此の仏の御功德をば法華經を信ずる人にゆづり給ふ。例せば悲母の食ふ物の乳となりて赤子を養ふが如し。「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」等云云。教主釈尊は此の功德を法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ給ふ。赤子の水火をわきまへず毒薬を知らざれども、乳を含めば身命をつぐが如し。阿含經を習ふ事は舍利弗等の如くならざれども、華嚴經をさとり事解脱月等の如くならざれども、乃至一代聖教を胸に浮かべたる事文殊の如くならざれども、一字一句をも之を聞きし人仏にならざるはなし。彼の五千の上慢は聞きてさとらず、不信の人なり。然れども謗ぜざりしかば三月を経て仏になりなき。

「若信若不信則生不動国」と涅槃經に説かるゝは此の人の事なり。法華經は不信の者すら謗ぜざれば聞きつるが不思議にて仏になるなり。所謂七步蛇しちぶじゃに食まれたる人、一步乃至七歩をすぎず。毒の用の不思議にて八歩をすごさぬなり。又胎内の子の七日の如し。必ず七日の内に転じて余の形となる、八日をすごさず。今の法蓮上人も又此くの如し。教主釈尊の御功德御身に入りかはらせ給ひぬ。法蓮上人の御身は過去聖靈しょうりょうの御容貌を残しおかれたるなり。たとへば種の苗となり、華の菓となるが如し。其の華は落ちて菓はあり、種はかくれて苗は現に見ゆ。法蓮上人の御功德は過去聖靈の御財みたからなり、松さかふれば柏かしわよろこぶ、芝こころかるれば蘭なく。情なき草木すら此くの如し。何に況んや情あらんをや、又父子の契りをや。

彼の諷誦に云はく「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰に至るまで釈迦如来の御前に於て自ら自我偈一卷を讀誦し奉りて聖靈に回向す」等云云。当時日本国の人、仏法を信じたるやうには見へて候へども、古いにしえいまだ仏法のわたらざりし時は、仏の申す事も法と申す事も知らず候ひしを、守屋もりやと上宮太子と合戦の後、信ずる人もあり又信ぜざるもあり。漢土も此くの如し。摩騰、漢土に入つて後、道士じょうろんと諍論あり。道士まけしかば始めて信ずる人もありしかども、不信の人多し。されば烏竜おりゅうと申せし能書は手跡の上手なりしかば人之を用ふ。然れども仏經に於てはいかなる依怙たのみありしかども書かず。最後臨終の時、子息の遺竜いりゅうを召して云はく、汝我が家に生まれて芸能をつぐ、我が孝養には仏經を書くべからず。殊に法華經を書く事なかれ。我が本師の老子は天尊なり、天に二日なし。而るに彼の經に唯我一人と説く、きくわい第一なり。若し遺言を違へて書

く程ならば、^{たちま}忽ち悪霊となりて命を断つべしと云って、舌八つにさけて頭七分に破れ、五根より血を吐いて死し畢んぬ。されども其の子善悪を弁へざれば、我が父の謗法のゆへに悪相現じて阿鼻地獄に墮ちたりともしらず、遺言にまかせて仏經を書く事なし。況んや口に誦する事あらんをや。かく過ぎ行く程に、時の王を^{しばし}司馬氏と号し奉る。御仏事のありしに、書写の經あるべしとて、漢土第一の能書を尋ねらるゝに遺竜に定まりぬ。召して仰せ付らるゝに再三辞退申せしかば、力及ばずして他筆にて一部の經を書かせられけるが、帝王心よからず、尚遺竜を召して仰せに云はく、汝親の遺言とて^{ちん}朕が經を書かざる事其の謂れ無しと^{いゝど}雖も且く之を免ず、但題目計りは書くべしと三度勅定あり。遺竜猶辞退申す。大王竜顔心よからずして云はく、天地尚王の進退なり。然らば汝が親は即ち我が家人にあらずや。私をもて公事を軽んずる事あるべからず。題目計りは書くべし。若し然らざれば仏事の庭なりといへども速やかに汝が頭を^は刎ぬべしとありければ、題目計り書きけり。所謂妙法蓮華經卷第一乃至卷第八等云云。其の^{たそがれ}暮に私宅に帰りて歎いて云はく、我親の遺言を背き、王勅術なき故に仏經を書きて不孝の者となりぬ。天神も地も定んで^{いか}瞋り、不孝の者とおぼすらんとて寝る。夜の夢の中に大光明出現せり。朝日の照らすかと思へば天人一人庭上に立ち給へり。又無量の^{けんぞく}眷属あり。此の天人の頂上の虚空に仏、六十四仏まします。遺竜合掌して問うて云はく、如何なる天人ぞや。答へて云はく、我は是汝が父の^{おりょう}烏竜なり、仏法を謗ぜし故に舌八つにさけ、五根より血を出だし、頭七分に破れて無間地獄に墮ちぬ。彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼへざりしに、無間の苦は尚百千億倍なり。人間にして鈍刀をもて爪をはなち、^{のこぎり}鋸をもて頸をきられ、炭火の上を歩ばせ、棘にこめられなんどせし人の苦を、此の苦にたとへば^数かずならず。如何してか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず。臨終の時、汝を^{いまし}誠めて仏經を書くことなかれと遺言せし事のくやしき申すばかりなし。後悔先にたゝず、我が身を恨み舌をせめしかどもかひなかりしに、昨日の朝より法華經の始めの妙の一字、無間地獄の^鼎かなへの上に飛び来たって変じて金色の釈迦仏となる。此の仏三十二相を具し^{めんみょう}面貌満月の如し。大音声を出だして説いて云はく「仮使法界に遍く断善の諸の衆生も一たび法華經を聞かば決定して菩提を成ぜん」云云。此の文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす。閻魔王は^{かんむり}冠をかたぶけて敬ひ、獄卒は杖をすてゝ立てり。一切の罪人はいかなる事ぞとあはてたり。又法の一字来たれり、前の如し。又蓮、又華、又經此くの如し。六十四字来たって六十四仏となりぬ。無間地獄に仏六十四体ましますば、日月の六十四、天に出でたるがごとし。天より甘露をくだして罪人に与ふ。抑此等の大善は何なる事ぞと罪人等仏に問ひ奉りしかば、六十四の仏の答へに云はく、我等が金色の身は^{せんたんほうざん}栴檀宝山よりも出現せず。是は無間地獄にある^{おりょう}烏竜が子の^{いりょう}遺竜が書ける法華經八卷の題目の八八・六十四の文字なり。彼の遺竜が手は烏竜が生める処の身分なり。書ける文字は烏竜が書にてあるなりと説き給ひしかば、無間地獄の罪人等は我等も娑婆にありし時は、子も^{つま}あり婦もあり眷属もありき。いかにとぶらはぬやらん。又訪へども善根の用の弱くして来たらぬやらんと歎けども歎けども甲斐なし。或は一日二日

・一年二年・半劫一劫になりぬるに、かゝる善知識にあひ奉って助けられぬるとて、我等も眷属となりて忉利天にのぼるか。先づ汝をおがまんとして来たるなりとかたりしかば、夢の中にうれしさ身にあまりぬ。別れて後又いつの世にか見んと思ひし親のすがたをも見奉り、仏をも拝し奉りぬ。六十四仏の物語に云はく、我等は別の主なし、汝は我等が檀那なり、今日よりは汝を親と守護すべし。汝をこたる事なかれ。一期の後は必ず来たって都率の内院へ導くべしと御約束ありしかば、遺童ことに畏みて誓って云はく、今日以後外典の文字を書くべからず等云云。彼の世親菩薩が小乗経を誦せじと誓ひ、日蓮が弥陀念仏を申さじと願ぜしがごとし。さて夢さめて此の由を王に申す。大王の勅宣に云はく、此の仏事己に成じぬ。此の由を願文に書き奉れとありしかば勅宣の如し。さてこそ漢土・日本国は法華経にはならせ給ひけれ。此の状は漢土の法華伝記に候。是は書写の功德なり。五種法師の中には書写は最下の功德なり。何に況んや読誦など申すは無量無辺の功德なり。今の施主十三年の間、毎朝読誦せらるゝ自我偈の功德は唯仏与仏乃能究尽なるべし。

夫法華経は一代聖教の骨髓なり。自我偈は二十八品のたましひなり。三世の諸仏は寿量品を命とし、十方の菩薩も自我偈を眼目とす。自我偈の功德をば私に申すべからず。次下に分別功德品に載せられたり。此の自我偈を聴聞して仏になりたる人々の数をあげて候には、小千・大千・三千世界の微塵の数をこそあげて候へ。其の上薬王品己下の六品得道のもの自我偈の余残なり。涅槃経四十巻の中に集まりて候ひし五十二類にも、自我偈の功德をこそ仏は重ねて説かせ給ひしか。されば初め寂滅道場に十方世界微塵数の大菩薩・天人等雲の如くに集まりて候ひし大集・大品の諸聖も、大日経・金剛頂経等の千二百余尊も、過去に法華経の自我偈を聴聞してありし人々、信力よはくして三五の塵点を経しかども、今度釈迦仏に値ひ奉りて法華経の功德すゝむ故に、靈山をまたずして爾前の経々を縁として得道なると見えたり。されば十方世界の諸仏は自我偈を師として仏にならせ給ふ。世界の人の父母の如し。今法華経寿量品を持つ人は諸仏の命を續ぐ人なり。我が得道なりし経を持つ人を捨て給ふ仏あるべしや。若し此を捨て給はゞ仏還って我が身を捨て給ふなるべし。これを以て思ふに、田村利仁などの様なる兵を三千人生みたらん女人あるべし。此の女人を敵とせん人は、此の三千人の將軍をかたきにくるにあらずや。法華経の自我偈を持つ人を敵とせんは、三世の諸仏を敵とするになるべし。今の法華経の文字は皆生身の仏なり。我等は肉眼なれば文字と見るなり。たとへば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども果報にしたがて見るところ各別なり。此の法華経の文字は盲目の者は之を見ず、肉眼は黒色と見る。二乗は虚空と見、菩薩は種々の色と見、仏種純熟せる人は仏と見奉る。されば経文に云はく「若し能く持つこと有らば即ち仏身を持つなり」等云云。天台の云はく「稽首妙法蓮華経、一帙八軸四七品、六万九千三八四、一々文々是真仏、真仏説法利衆生」等と書かれて候。之を以て之を案ずるに、法蓮法師は毎朝口より金色の文字を出現す。此の文字の数は五百十字なり。一々の文字変じて日輪となり、日輪変じて釈迦如来となり、大

光明を放って大地をつきとをし、三悪道無間大城を照らし、乃至東西南北、上方に向かつては非想非非想へものぼり、いかなる処にも過去聖霊のおはすらん処まで尋ね行き給ひて、彼の聖霊に語り給ふらん。我をば誰とか思し食す。我は是汝が子息法蓮が毎朝誦する所の法華経の自我偈の文字なり。此の文字は汝が眼とならん、耳とならん、足とならん、手とならんとこそ、ねんごろに語らせ給ふらめ。其の時過去聖霊は我が子息法蓮は子にはあらず善知識なりとて、娑婆世界に向かつておがませ給ふらん。是こそ実の孝養にては候なれ。

抑 法華経を持つと申すは、経は一なれども持つ事は時に随つて色々なるべし。或は身肉をさひて師に供養して仏になる時もあり、又身を床として師に供養し、又身を薪となし、又此の経のために杖木をかほり、又精進し、又持戒し、上の如くすれども仏にならぬ時もあり。時に依つて不定なるべし。されば天台大師は適時而已と書かれ、章安大師は「取捨得宜不可一向」等云云。問うて云はく、何なる時か身肉を供養し、何なる時か持戒なるべき。答へて云はく、智者と申すは此くの如き時を知りて法華経を弘通するが第一の秘事なり。たとへば渴ける者は水こそ用ふる事なれ。弓箭兵杖はよしなし。裸なる者は衣を求む、水は用なし。一をもて万を察すべし。大鬼神ありて法華経を弘通せば身を布施すべし、余の衣食は詮なし。悪王あて法華経を失はゞ身命をほろぼすとも随ふべからず。持戒精進の大僧等法華経を弘通するやうにて而も失ふならば是を知つて責むべし。法華経に云はく「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」云云。涅槃経に云はく「寧ろ身命を喪ふとも終に王の所説の言教を匿さゞれ」等云云。章安大師の云はく「寧ろ身命を不匿教とは身は軽く法は重し身を死して法を弘む」等云云。

然るに今日蓮は外見の如くば日本第一の僻人なり。我が朝六十六箇国、二つの島の百千万億の四衆上下万人に怨まる。仏法日本国に渡つて七百余年、いまだ是程に法華経の故に諸人に悪まれたる者なし。月氏・漢土にもありともきこえず、又あるべしともおぼへず。されば一閻浮提第一の僻人ぞかし。かゝるものなれば、上には一朝の威を恐れ、下には万民の嘲りを顧みて親類もとぶらはず、外人は申すに及ばず。出世の恩のみならず、世間の恩を蒙りし人も、諸人の眼を恐れて口をふさがんためにや、心に思はねどもそしるよしをなす。数度事にあひ、両度御勘気を蒙りしかば、我が身の失に当たるのみならず、行き通ふ人々の中にも、或は御勘気、或は所領をめされ、或は御内を出だされ、或は父母兄弟に捨てらる。されば付きし人も捨てはてぬ。今又付く人もなし。殊に今度の御勘気には死罪に及ぶべきが、いかゞ思はれけん佐渡の国につかはされしかば、彼の国へ趣く者は死は多く、生は希なり。からくして行きつきたりしかば、殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり。鎌倉を出でしより日々に強敵かさなるが如し。ありとある人は念仏の持者なり。野を行き山を行くにも、そばひらの草木の風に随つてそよめく声も、かたきの我を責むるかとおぼゆ。やうやく国にも付きぬ。北国の習ひなれば冬は殊に風はげしく、雪ふかし。衣薄く、食ともし。根を移されし橘の自然にからたちとなりけるも、身の上につみしられたり。栖にはおばなかるかやおひしげれる野中の御三昧

ばらに、おちやぶれたる草堂の、上は雨もり壁は風もたまらぬ^{かたわ}傍らなり。昼夜耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、朝暮に眼に遮る者は遠近の路を埋む雪なり。現身に餓鬼道を経、寒地獄に墮ちぬ。彼の蘇武が十九年の間胡国に留められて雪を食し、李陵が巖窟^{がんくつ}に入って六年^{みの}蓑をきてすごしけるも我が身の上なりき。今^{たまたま}適御勘気ゆりたれども、鎌倉中にも且くも身をやどし、迹をとどむべき処なければ、かゝる山中の石のはざま、松の下に身を隠し心を静むれども、大地を食とし、草木を著ざらんより外は、食もなく衣も絶えぬる処に、いかなる御心ねにてかくかきわけて御訪ひのあるやらん。知らず、過去の我が父母の御神の御身に入りかはらせ給ふか。又知らず、大覚世尊の御めぐみにやあるらん。涙こそおさへがたく候へ。

問うて云はく、抑^{そもそも}正嘉の大地震・文永の大彗星を見て、自他の叛逆^{ほんぎやく}我が朝に法華経を失ふ故としらせ給ふゆへ如何。答へて云はく、此の二の天災地夭は外典三千余巻にも載せられず、三墳・五典・史記等に記する処の大長星・大地震は、或は一尺・二尺・一丈・二丈・五丈・六丈なり。いまだ一天には見へず。地震も又是くの如し。内典を以て之を勘ふるに、仏御入滅己後はかゝる大瑞出来せず。月支には弗沙密多羅王の五天の仏法を亡ぼし、十六大国の寺塔を焼き払ひ、僧尼の頭をはねし時をかゝる瑞はなし。漢土には会昌^{かいしょう}天子の寺院四千六百余所をとどめ、僧尼二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せず。我が朝には欽明の御宇に仏法渡りて守屋仏法に敵せしにも、清盛法師七大寺を焼き失ひ、山僧等園城寺を焼亡せしにも出現せざる大彗星なり。当に知るべし、是より大事なる事の一閻浮提の内^{もんぶつだい}に出現すべきなりと勘へて、立正安国論を造りて最明寺入道殿に奉る。彼の状に云はく^{取註}、此の大瑞は他国より此の国をほろぼすべき先兆なり。禅宗・念仏宗等が法華経を失ふ故なり。彼の法師原が頸^{くび}をきりて鎌倉ゆみの浜にすてずば国当に亡ぶべし。其の後文永の大彗星の時は又手ににぎりて之を知る。去ぬる文永八年九月十二日の御勘気の時、重ねて申して云はく、予は日本国の棟梁^{とうりょう}なり。我を失ふは国を失ふなるべしと。今は用ひまじけれども後のためにとて申しにき。又去年の四月八日に平左衛門尉^{へいのさ えもんじょう}対面の時、蒙古国は何比かよせ候べきと問ふに、答へて云はく、経文は月日をさ^{てんげん}ず、但し天眼のいかり頻りなり、今年をばすぐべからずと申したりき。是等は如何にとして知るべしと人疑ふべし。予不肖^{ふしょう}の身なれども、法華経を弘通する行者を王臣人民之^{あだ}を怨む間、法華経の座にて守護せんと誓ひをなせる地神いかりをなして身をふるひ、天神身より光を出だして此の国をおどす。いかに諫むれども用ひざれば、結句は人の身に入って自界叛逆^{ほんぎやく}せしめ、他国より責むべし。問うて云はく、此の事何なる証拠あるや。答ふ、経に云はく「悪人を愛敬^{あいぎょう}し善人を治罰^{じばつ}するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行らず」等云云^{それ}。夫天地は国の明鏡なり。今此の国に天災地夭あり。知んぬべし、国主に失ありと云ふ事を。鏡にうかべたれば之を諍^{あらそ}ふべからず。国主小禍のある時は天鏡に小災見ゆ。今の大災は当に知るべし大禍ありと云ふ事を。仁王経には小難は無量なり、中難は二十九、大難は七とあり。此の経をば一には仁王と名づけ、

二には天地鏡と名づく。此の国土を天地鏡に移して見るに明白なり。又此の経文に云はく「聖人去らん時は七難必ず起こる」等云云。当に知るべし、此の国に大聖人有りと。又知んぬべし、彼の聖人を国主信ぜずと云ふ事を。問うて云はく、先代に仏寺を失ひし時何ぞ此の瑞なきや。答へて云はく、瑞は失の軽重によりて大小あり。此の度の瑞は怪しむべし。一度二度にあらず、一返二返にあらず、年月をふるまゝに 弥 盛んなり。之を以て之を察すべし、先代の失よりも過ぎたる国主に失あり、国主の身にて万民を殺し、又万臣を殺し、又父母を殺す失よりも聖人を怨む事彼に過ぐる事を。今日本国の王臣並びに万民には、月氏・漢土総じて一閻浮提に仏滅後二千二百二十余年の間いまだなき大科、人ごとにあるなり。譬へば十方世界の五逆の者を一处に集めたるが如し。此の国の一切の僧は皆提婆・瞿伽利が魂を移し、国主は阿闍世王・波瑠璃王の化身なり。一切の臣民は雨行大臣・月称大臣・刹陀・耆利等の悪人をあつめて日本国の民となせり。古は二人三人逆罪不孝の者ありしかばこそ其の人の在所は大地も破れて入りぬれ。今は此の国に充滿せる故に日本国の大地一時にわれ、無間に墮ち入らざらん外は一人二人の住所の墮つべきやうなし。例せば老人の一二の白毛をば抜けども、老耄の時は皆白毛なれば何を分けて抜き捨つべき。只一度に剃り捨つる如くなり。問うて云はく、汝が義の如きは我が法華経の行者なるを用ひざるが故に天変地天等ありと。法華経第八に云はく「頭破れて七分と作らん」と。第五に云はく「若し人悪み罵れば口即ち閉塞す」等云云。如何ぞ数年が間罵るとも怨むとも其の義なきや。答ふ、反詰して云はく、不軽菩薩を毀訾し罵詈し打擲せし人は口閉頭破ありけるか如何。問ふ、然れば経文に相違する事如何。答ふ、法華経を怨む人に二人あり。一人は先生に善根ありて、今生に縁を求めて菩提心を発こして、仏になるべき者は或は口閉ぢ、或は頭破る。一人は先生に謗人なり。今生にも謗じ、生々に無間地獄の業を成就せる者あり。是はのれども口則ち閉塞せず。譬へば獄に入って死罪に定まる者は、獄の中にて何なる假事あれども、死罪を行なふまでにて別の失なし。ゆりぬべき者は獄中にて假事あればこれをいましむるが如し。問うて云はく、此の事第一の大事なり。委細に承るべし。答へて云はく、涅槃経に云はく、法華経に云はく云云。

日 蓮 花 押